



# 岐蘇林多

## 目次

- 生徒募集廣告
- ▲論說
- 行程一千日
- 岩田兄に答ふ
- 調牛
- 年頭感
- ▲雜報
- 學校記事
- 校友會便り
- 長野蘇門會便り
- 其他
- 會員消息

第六年一月二十五日 第八拾七號 第三種郵便物認可 (明治四十四年六月十四日) 每冊廿五日 (行刊期定)

### 生徒募集廣告

來四月本校第一學年ニ入學セシムベキ生徒約五十名募集ス手續左ノ通り  
大正六年一月 長野縣立木曾山林學校

#### ○入學手續

本校ニ入學セントスルモノハ入學願書ニ履歷書、戶籍謄本及体格検査書ヲ添ヘ來三月廿日迄ニ差出スベシ其様式左ノ如シ

#### 入學願書(用紙美濃紙)

御校へ入學志願ニ付御許可被成下度履歷書、戶籍謄本及身体検査書相添へ此段願上候也

年 月 日

何府縣何郡市町村何番地居住 (寄留ナラバ寄留地ヲモ記スベシ)

何府縣族稱 雜子弟

入學志望者 何 某印

同上

右父母後見人 何 某印

長野縣立木曾山林學校長七宮純雄殿

#### 履歷書

本籍、何府縣何郡市町村番地族稱戶主  
又ハ誰子弟  
寄留地、何府縣何郡市町村番地

何 某印  
生年月日

### 學業

- 一、何年何月ヨリ何校ニ於テ何年修業又ハ卒業(證書ノ寫ヲ添フベシ)
- 一、何年何月ヨリ何年何月迄何處何某ニ就テ何學ヲ修ム等

#### 賞罰

- 一、何年何月何處ニ於テ何事ニ付賞又ハ罰ヲ受ク
- 右之通り相違無之候也
- 年 月 日

#### 身体検査書

本籍、何府縣何郡市町村番地族稱  
寄留地、何府縣何郡市町村番地

何 某  
生年月日

- 一 体格 一 身長 一 体重
  - 一 胸圍 一 中心視力色盲 一 聽力耳疾
  - 一 痘 一 呼吸器 一 神經系
  - 一 皮膚 一 言語
  - 一 既往現在ノ疾病又ハ畸形 一 四肢運動障害ノ有無
- 右検査候處相違無之候也
- 年 月 日 検査 住所
- 何學校醫又ハ醫師 氏 名印

尙詳細ハ本校ニ承合セラルベシ

論說

誓程一千日 (三)

會山子

六十萬キロワットの電力を包容する信州の山河百幾十方頃秋既に暮れて今や大正丁巳の新春を迎ふるに忙はし

雪解けて流れて行くや常世國  
冷たき水赤き燈一夜哉

「木曾山林學校國立問題」が松岡縣會議員により興味ある一クエスションとせられてより茲に四年、而して本期又第三回議題となりて縣議壇上に現はる唯其事の内閣の交渉帝國議會の解散等不測の障礙により實現するに至らず、と雖此間に於ける同氏の奔走盡瘁たる吾人の欣幸嘆美措く能はざる處のものあり、余は新春更に禿筆を呵して「會國立未來記」一章を草して同志と共に同氏に謝する處あらんとす

林友誌革新問題に就ては曩に數子によりて誌上に論及せられしもの蓋し其一斑なるべし凡る革新は世の推移と雁行並進するもの何れの時何物と雖其之れを要せざるなく亦之れあるも左程の賞讃と思はれず又悪事にあらざる當然事のみ

更に貴兄の熱心に林友編輯に盡されつゝあるは、私としては(全校友舉つてさうでありませうが、此の場合特に私としてといふことを許して戴きます)衷心よりの感謝と歡喜とを捧げようと欲するものであります

翻つて、私のあの林友論は、頗る蕪雜、幾度か自己嘲笑と、自己憐憫とを除義なくさせられました。それにも係らず御通讀下された貴兄及他の校友諸兄の誠意と厚意とに對して、衷心の謝意を表すると共に、私自身の羞恥感によつて、吾と吾身を責めるものであります

偕、前號の本誌上に御書き下さつた、貴兄のあの一文は、もう數回讀返しました。ううして、ごく大ざつぱではあるが、大體次のやうな意味のものとして解釋致しました。

- (一)、現實に對する解釋は、
- イ、林友の各頁は、何等かの尊重すべき努力の産物であつて、單に空疎なご託し去るべきものではない。
- ロ、林友と校友との關係は、決して吾々の思惟するやうな悲境にはない。
- (二)、理想としての欲求は、
- イ、一般校友が、今少し林友に接近する必要がある。

此等の結論及其過程について見ても、いかにも頷かれるもの多かつたは、實に會心のことであります。

只其内容の巨細に至りては各其の見を異にするべくも余は彼の一旦母校を辭して東西幾百里間に離散し活社會の多種なる奮闘裡に在る同窓が在りし昔と今の様とを結合せしめし所感研鑽等を本誌上に一輯し以て相互の氣分を母校を通して味はしめんとするもの恐らく本誌目的の大部分とす  
「昔三代將軍の頃なりしかを仲となん呼べる儒醫あり其名一世に高く如何なる難病痼疾も彼れが一匙の投薬により立所に平癒す偶貧者の懇請あり投するに一封の山吹色の金扇を以てせり」と  
先づ以てコンナ所ならん  
若し夫れ會門會便りなるものに至りては未だ吾人の意に滿たざるもののみ只遠來の珍客佳賓と席上會談の間一片の紀念のみとす其の本誌に誇らんとする來客の快辯抱負を傾聴するの時は筆者(主人役)既に杯盤裡に疲れて筆の所在を失ふの致す處又遺憾なれども止むなし然れども各地より此種の「ボート」が時々誌上に散見せらるゝは與多く又駄句の寄せ書き夫れ自体を目的として役せらるものと思ふ程のヤボも恐らく澤山には有らざると思はる又一座輿のみ果して如何にして余は此の序を以て一言すべし  
曰く前號誌上の渡邊君外一名より通信文(

私は、此等の結論と其過程との暫時の嘆賞の後、更に一步を進めて、貴兄の有する何物が、かの過程と結論とを生せしめたかを見ようと思つた。が、それは、較々茫漠たる者で、私の愚鈍な頭を以てしては到底捕捉し難い程のものであります。が大略次のやうな觀念から來たものではないかと思ふことが出來ました。

自己に對する忠實なる努力といふこと  
この「自己に對する忠實なる努力」といふことは、最も尊重すべき事柄であつて、人間の行爲の總ては、此を其發足點とするものであります。

- 茲に於て私は、あの一文の有した表面的事實と、その内在的觀念との兩々對をよりして、次の三つの疑問を作りました。
- (一)、林友の記事は、其依つて成つた過程のみにより評價し得るか
- イ、讀者に何物をも與へないもの。
- ロ、讀者に何物かを與ふるもの
- の二種に大別することが出來ます
- 然して公開といふことの性質上、その掲載する所の記事の接觸面といふことが、常に其筆者の考慮の内になければならないことと思ひます。今自分の日記を書きやうな

校長宛)の如きは恐らく多くの校友が聞くを喜ぶもの丸山君が三號に亘りて健筆を揮はれし革新の目的に副ふものなるべし然かも此短編が同氏の爲せし其れよりも革新的價值我輩の論鋒よりすれば一層大なるものあらざるなき乎  
況んや忘れ物を受け取りたる時の如く卒然とし痛評論難自ら高く竊かに會心の笑を湛へんとするものありとせば夫は恐らく其の雅氣を告白するに止まるのみ  
(十二月十四日北安曇白馬山麓より)

岩田兄に答ふ

丸山 岩吉

「愛するが故に吾は憎む。」この語の本當の意味を考へて見たいのであります。私達をよく自分自身の弟妹を叱責することがあります。がしかし、他所の子供に對しては到底それ程の叱責は起りません。何故でせうか。  
勿論私は「他を責むると等しく、否られ以上に、吾は吾自らを責む。」てふ言葉を、何時も忘れようとは思ひません。林友及校友諸兄を惡罵した吾罪の輕減を乞はんがため、敢てこの一語を、貴兄の高覽に供しようと思ひます。  
貴兄の誠意と友情とに對して、私は常に感謝と崇美の念を禁じ得ないものであります。

心持で(勿論私の日記は何等他との接觸を持たないといふことではありません)林友の記事を筆する人があつたならば、其人は公開といふことの性質を無視するもので従つて林友の性質を無視する人であり、決して自己に對して忠實であつたと許すことは出來ません。而して、其接觸面の廣大といふことを常に苦慮し、その爲めに努力する人は、最も林友の性質を重んずる人であつて、従つて自己に對して忠實な人であります。  
形式的價值と、内容的價值とは、かかる所で一致します。  
かういふ意味で、貴兄のあの一文の第二節に對して、此の疑問を發します。
- (二)、校友誌上の記事は、其過程に常に尊嚴を有つか。
- 記事の成つた動機といふものを考へて見ると、少くとも次の四つが存在し得られることと思ひます。
- 記事そのものに依つて來た點から見ると、
- イ、單なる思ひ付きに過ぎないもの、
- ロ、平生の持論乃至感想より來たもの、

執筆者の心持の上から見ると、  
イ、自己の鋭才若しくは聰明  
を誇らうとするもの、  
ロ、讀者に何物かを附與しよ  
うとするもの、

これ等が種々の關係に結び付いて  
其物の動機を構成します。  
故に單なる思ひ付き、即ち他の書  
籍や雜誌の底から見出したものを  
其儘、自己の生活といふものに對  
して何等の反照を用ひることなし  
に書き立つるが如き、または自己  
の才のみを誇らうとして、其執筆  
の責任に就いて、何等の考慮をも  
なさないといふが如きは、自己に  
忠實なるものと許すことの出來な  
いと等しく、又林友に對しても、  
忠實なるものと言ひ難いのであり  
ます。

林友の記事は、常に自己生活が其  
中心若しくは背景をなし、一般校  
友の生活を其對象として居なけれ  
ばなりません。故に執筆者は、常  
に其苦慮と努力とを、此點に集中  
する必要があるのであります。  
かういふ意味で、貴兄の第三節中  
の文字に對し、此の疑問を挟みま  
す。  
(三) 一般校友の自覺てふことを説くは、

ろことして許されるかも知れないが、今少  
し年取つた、若しくは今少し物の判つた人  
からは、單なる空想若しくは屁理窟として  
貶されるべきものだといふことであら  
ない。が今の青二才としこの私に於ては、(後  
日はいざ知らず)これを單なる屁理窟とし  
て眺めたくはないのであります。私は毎時  
もこれを、何等かの意味に於て、自分の考  
慮のうちに取り入れようとするものでありま  
す。勿論私の微力は、自分の有するこの觀  
念を、自ら裏切るやうな破目に毎時にもかも  
陥らせられます。けれ共その故を以て、自  
分のこの觀念が、全然無價値であると斷ず  
ることは、單なる未練よりしてかなし得な  
いのであります。

今一つた斷りたいことは、貴兄と私と  
は何等かの意味に於て、其異つた立場にあ  
りはしないかといふことでありましたが、即  
ち質の両面を見るときは事實が、何等かの  
程度に於て、存在しはしなかつたかと思は  
れることであつた。若しさうであつた  
としたならば、茲でこんなことをいふこと  
は、全然私の愚といふことに歸しなれば  
ならないのであります。かういふ理由から  
それに対する自家辯護も一應書いて見まし  
た。があまりに紙面を費すことを恐れて、  
こゝではそれを省きました。だから若しさ  
ういふ疑問が起つたならば、その折改めて  
辯解することと致します。

全爲の空論か。

林友は、木曾の校友の爲めには、  
愛讀すべき性質のものでありま  
す。  
愛讀といふは、熱愛を其上に持つ  
といふことが其最大條件である  
同時に、それをよく讀み、よく考  
へるといふ行爲が、それが氣めに働  
かなければならないことと思ひま  
す。  
今或物を愛讀する理由を考へて見  
ますと、  
イ、そのものが愛讀するに足る  
ものとなすもの(偶然的)  
ロ、そのものは愛讀すべきもの  
なりとなすもの(必然的)  
の二つが大別の上に存すること  
思ひます。

林友が今の所、偶然的愛讀を受け  
るに足る丈の價値を、十分に具へ  
て居るといふことは、較々肯定に  
若しむ問題であります。  
愛讀といふことは差置いて、單に  
讀まれる、更に安く見積つて、拒  
絶せられるといふことなしに受け  
取られるは何が故かといふならば  
るは各自が、木曾の校友だといふ  
昔馴染位の茫漠たる感じからであ  
ることと思ひます。

最後に、私のこれは、私の乏しい過去の  
經驗と、狭く淺い見聞と、而して纏りのつ  
かない抽象觀念とから書き上げたものであ  
ります。だから、私の經驗が共通性を持た  
ないものであつたか、若しくは私の見聞が  
實際に徹しなかつたか、或は抽象觀念に誤  
りがあつたかしたならば、私のこれは全然  
若しくは大半、其存在性を失はなければな  
らないのであります。それを更に指摘して  
下さつたならば、私の甚しく幸福とする所  
であります。

とはいつても、もとく、これは、貴兄の  
あの一文に對へてのものでありますから、  
貴兄のあの一文に對する解釋を誤つて居る  
か、或は全然無關係のことを言つて居るの  
であつたならば、私の蒙を啓くため、  
御指摘あらんことを偏に希望するものであ  
ります。

隱岐の鬪牛と越後の鬪牛

宇 紫 生

禿筆を呵して引續き嶋根縣の一瞥記述致  
すべきの處本年は世流に眞似て數ヶ所に  
林相品評會を開催して審査等に時日を費  
し且又明年大日本山林會大會開催の準備  
行爲に忙殺せられ遂に申運となり時期を  
失し今更に山林會報の後を追ひて記述す  
るも聊か間の抜けたる氣味に付茲に先日  
古志二十村を巡りて鬪牛の本場太田村に

今、其昔馴染みといふ茫漠たる感  
じから、更に一步を進めて、吾は  
木曾の校友であるといふ自覺の門  
戸に立つたならば、即ち自己とい  
ふもの、全面に向つて、注意の眼  
が廻つて來た時、始めて讀んで見  
るといふ行爲に移り、更に一層の  
自覺に進み、自己の全面を完全に  
知り、深く自己の有する責任を體  
得したならば、その時はじめて、  
愛讀といふ行爲に移つて行くこと  
と思ひます。(勿論林友の形式的内  
容といふものが此と併進すること  
は、林友論中に於ても少し語つた  
通りであります。)

以上は皆一部の疑問であつて、この疑  
問の解決が、萬一私の考へて居るやうなも  
のになつたとしても、それを以て貴兄のあ  
の一文の中の、幾つかの結論と其過程とを、  
傷けることは出來ないのであります。こと  
によつたら全然貴兄と同じ事を言つて居つ  
たかも知れません。  
此所迄來て私は、自ら戦かされた或物に  
行き合ひました。それは私の今迄言つたこ  
とは、私と同様若し人達からは、或は一種  
の理想若しくは理論(例令誤つて居るにし

至り兩者の比較を談するの機會に遭遇し  
即ち今夏隱岐の夫れを想起して紙上を汚  
す

●山林大會視察旅行の附録として一日隱岐  
の國西郷町を北に去る里餘中條村に鬪牛を  
見る、

視察員は元より近在の觀客谷間に充滿し、  
猛牛の叫聲山野に振ひて仲夏の陽光更に一  
層の暑熱を加ふるを覺ゆ、

●已にして用意なるや一人の壯者聲を上げ  
て、其取組を叫ぶ、言ふ處容易く解し得ざ  
るも手にせる番附により隣人に聞けば即ち  
小結登龍門、彼方向とかなり、聲に連れ谷  
間約五六反歩の草原に現はるを見れば、

先六月織に類し其名を染振きたる旗幟幾旋  
を先頭とし奇装の牛使、黃紅、白紫の布片  
に掩はれたる小結牛を曳きて土俵入をなす  
威容堂々衆皆歡呼す

●聽て場を一週して外に出づれば即ち牛使  
は各布片を除きたる牛を曳來りて所定の位  
置に近かじめ呼吸を計りて團扇を引く、吼  
聲一段高くと發矢と頭角を突合す

●牛使は鼻に填入せる綱を握りて奇聲を發  
して互に應援すれば虚を突きて前額を押し  
んとし或は頭を低く垂れて地に附け、或は  
角を左右に動揺して敵勢を檢察す、已にし  
て角逐數合、あはやと見る間もなく一頭は  
たち／＼と押れて後進するを見る間に急遽  
横轉して横面をすつくと突き進む、さはさ

せじと敵もさるもの、之も亦身を轉して虚  
 虚實や棲槍の氣場を壓し觀客手に汗を握る  
 ○東の方斑黒の二牛前肢低く張りて敵の下  
 額を押すよと見るに猛力額に充ち後肢緊躍  
 與廣此一舉と許り猛ひ立てば構むべし敵牛  
 は脆くも潰へて觀客の中にどつと割り入り  
 勝敗茲に決しぬ

○關脇又大關、此の如くにして取組漸次進  
 ひ、斯くして其勝者の所有者及應援者は凱  
 歌を絶叫して狂せるが如く牛背に飛び上り  
 尻邊を亂打して喧争の聲暫時は鳴りも止ま  
 す、觀客又之に呼應して冷靜否、暑氣飽溢  
 の余畫等をして臨然たらしむる時を久し  
 ぶす

○蓋し隱岐の闘牛は其源を後鳥羽天皇の乙  
 覽に供せしに始り今尙國技として年數回各  
 地に開催せられ嶋民娛樂の一たりと云ふ、  
 然れども余輩等より之を見れば鼻輪不去の  
 一事によりて著しく興味(越後に比するが  
 故に爾あらんか)を減殺し畢竟遊戯たり終  
 らんとするの傾なくんばあらず

○而して今越後の闘牛を見るに其歴史は、  
 馬琴の闘牛考にあるが如く將又其八犬傳に  
 引用せられたるが如く極めて古き歴史を有  
 するものにして昔時は單に娛樂のみに止り  
 しやも未だ知るべからずと雖も現在に於て  
 は一面畜牛改良を意味し一面青年の志氣鼓  
 舞を包有せるものならずんばあらず  
 ○闘牛の本場たる二十村(俗稱にして古志

郡太田、東山、東竹澤、竹澤、種芋原の五  
 ケ村を總稱す)に至る事數回にして又闘牛  
 を見るごと二回に及べり、今隱岐の夫と異  
 なる處を擧ぐれば我越後のものは全然開放  
 的なり、鼻輪及綱を取り去り自由に闘争せ  
 しめ牛使の應援すること隱岐の如からず、  
 低凹の草原に兩者を對應せしめて時々敗者  
 を遠く逸し或は肢を裂き、腹を突き、遂に  
 死に瀕せしむる事なきを保せず、然れども  
 死に至るは極めて珍なる事象にして已に勝  
 敗の決するや待ち構へたる青年の群は直に  
 再者に蟬集して尻尾を引き頭角を捕へ、有  
 無を言はせず鼻輪を填入す

○或は時にアオリと稱して闘争の餘勢を驅  
 つて人を襲はんとするものあれば、即ち綱  
 を投じて前肢後肢に纏捉し角に結びて多數  
 ごとと之に纏ひ附く  
 若者と觀客の叫聲山谷に振ひ壯烈の狀言語  
 に絶するものあり

○其争や無謀に近く、時に負傷するものな  
 きを保せざるも其志氣を鼓舞する幾何なる  
 や知るべからず  
 無謀は即ち無謀なりと雖も青年時の無謀の  
 勇なくんば何事か絢爛の事業あるべき、明  
 治維新の鴻業も畢竟青年無謀の勇が遂に有  
 謀の果を生じたるのみ  
 歐洲戰亂の因亦獨が無謀の勇に歸せずんば  
 ならず

○然れども又靜に各闘牛の動作を觀察すれ  
 ば其体驅と力量とをのみ以て雄雌を決す  
 るにあらざりて、一の呼吸と場馴れたる經驗  
 上の胆力と且機を見る智の閃めきを感得  
 せずんばあらず  
 ○人事亦何ぞ之と異らん、夫の佛の虚を突  
 きて一舉巴里を屠らんとし、露の平野を蹂  
 躪して直に跋を巡してバルカンを突けるが  
 如き獨の智と胆と勇と何る其の相似たる  
 ○生物の存する限闘争は即ち之あり、闘争  
 なきに至るの時は治者と被治者と、強者と  
 弱者との階級化が顯然として犯すなきに至  
 るの時にして生物進化は即ち終りを告ぐる  
 に至らん時のみ

### 年頭の感

岐 蘇 仙 人

多幸なる新年を賀し併而我が親愛なる校友  
 諸兄の御健勝を祈る。

○めぐる月日の小車は進み／＼て絶間なく  
 茲に一陽來復し瑞雲變難たる間より赫々た  
 る日影が昇り無限の光彩を放ち慈母の情の  
 如き温味を地上に投げ木枯に惱されたる木  
 々の梢も甦生し軒端に鳴く雀の聲も旗のひ  
 らめきも汽車汽船の汽笛迄も皆よろこばし  
 く聞きなして一盞の屠蘇に酔を購ひ飛行機  
 に乗りたるが如き心地して年賀の回禮に出  
 で行く新年のよろこびは貴賤鄙鄙の差別な  
 く年中行事の最も樂しき事ならむ。

○乍然余は熟々考ふるに越年は左程迄に樂  
 しきものであらうか?

○前途に希望の光明を認め時々刻々に活動  
 期に近づきつゝある好運得意の寵兒に取り  
 ては成功の一里塚にして迎年は或は無上の  
 樂しみならむも老域に達したる人或は余の  
 如き成す事もなくして過ぎ寄る年波に一驚  
 を喫し居る非運不幸の輩に取りては寧ろ悲  
 しき一里塚と思はれるなり。  
 ○假令寵兒なりと雖も此の華やかな新年は

何時迄も其身邊に着き纏ふにあらす此新年  
 を謳歌するも何年かあらむ此の時た當り吾  
 々は大いに考慮せざるべからずは自分は  
 此の尊き青年期に於て忠實なるか將又彼の  
 清淨高尚なる希望を抱いて努力しつゝある  
 かを

○漫然として此の青年期を經過せば其れこ  
 そ取り返しのつかざる悔悟の多きことなら  
 む古人の詩にも「年々歳々花相似、年々歳  
 々不同人」とある如く花は本年散るとも又  
 來年香しき匂ひを放ち其色を競ふとも人生  
 の春は去りて再び歸らず日に月に年に此の  
 歸らざる尊きタイムを過去に葬りつゝある  
 事を忘るべからず古人の詩に又「盛年不再  
 來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人」  
 と云ひしも此の點を指摘したるものにあら  
 ずや。

○それ我が校友ニユー・ホープに満てる青年  
 常に覺めたる態度を以て大いに修養に努め  
 ざるべからず天は今吾々に向つて大いに學  
 べ働け遊べ歌へ而して世のあらゆるものを  
 征服せよと使命を賜りつゝあるにあらずや  
 若しこの使命に背かざる程のベストを盡し  
 て努力しなければ天に向つて何の申譯すべ  
 きであるか。  
 ○此の熱血漲る青年期に於て遺憾なく活動

○闘ひなる哉、吾人は日常闘ひの爲に自  
 ら強ふし闘の爲に強からんことを努む、吾  
 人が所在の山野と戦つて之を征伏するの時  
 其處に勝者の綠幟は樹立せられん、吾人が  
 無識の人士と戦つて經營を統一するの時其  
 處に治水の効果を發現すべし  
 更に我國民が歐米との商戦に凱歌を奏する  
 の時即ち其處に東亞の盟主たる光輝赫躍す  
 ○闘の前先其体力と智力と胆力とを養へ、  
 後敵の虚を突け、全力を盡せ、最後の一戦  
 に耐久せよ、必勝其中にあり  
 (書き終りて稚氣漫々たるものあり、矢  
 張り余も亦漸く而立に達せんとする青年  
 なり)

し然り而して凱歌を擧げ額に皺を迎ふ可き  
 にあらずや若し人生の計は青年にありとせ  
 ば一年の計は正に其の年のスターチングボ  
 イントにあり故に過去は過去として葬り年  
 改まると共に新しき道を開拓し充實したる  
 ライフを送るべく希望を提げて未來に生き  
 醉生夢死する事なく確乎不可動の決心を以  
 て活動し冀くば徒に逡巡してカーライルの  
 所謂「人生は躊躇なり」に終らざらんことを  
 それ我が校友年改まると共に緊揮一番大い  
 に新活動をなすべし然らずんば歳終に至り  
 天は吾々に向ひ「汝悔ひたるべし來年も亦  
 斯の如きのみ」といふに至らむ。  
 ○歳首に當り我が所感を述べ校友會諸兄の  
 覺醒を促したる次第なり(維時大正六年一  
 月零下二十八度の北韓にて)

### 恭詠勅題遠山雪 二首

新家園一面

むさしの、尾花が末にうすがすむ雪のたか  
 ねや鏡波なるらん  
 からさきの松の葉越にながむれば比良のね  
 白く雪はふりけり

### 學校記事

○七宮校長出縣 舊臘十二月廿二日七宮校長は縣廳内に開催の縣下林業技術員會議に列席のため出縣尙本年正月十日には學校の用務を帯びて出縣せられたり

○宮川教諭出張 宮川教諭は二月廿、廿一日の兩日松本女師校に開催の信濃博物調査會講演會に出席の爲出松せられたり

○始業式 一月廿二日講堂に於て始業式を擧げ七宮校長の簡にして要を得たる訓辭ありて閉式

○山本聖峰氏講演 長野新聞主筆にして縣會議員なる同氏は始業式の當日入峽せられたるを機とし我校を視察せられ序を以て生徒一同の爲め一時間餘に涉り講演せられたるが要旨は先づ山林は神の在ます所即ち神聖なる所なるに反し平原は濁濁腐敗の地なり故に山林の氣を帯びたるものは創造力に富み滾々たる生命の活泉を以て能く平原の濁濁腐敗を洗滌一新する事を得るを説き次に精神生活を度外して單に衣食を足らし財を豊にするも畢竟無意味なるを力説し將來林業を以て立つ本校生徒は林業を己の生命とし趣味とし己の學びたる事を能く消化し良く之を具体化して己の信仰を以て事に當るべく斯くてこそ自己の人格も其事業に

乗り移る事を得て其處に其鳴を感じ無限の愉快を感ずべけれ  
とて説去説來多大の感銘を與へられたり

校友會便り

師走の拾六日我校友會は忘年會を兼ねて大正五年掉尾の辯論會を開催せり例により左に氏名を掲げて聊か月旦を試みん

開會の辭 平田久良治君

○辛抱 水野謙一郎君(一)

論壇は初陣と見え場慣れずと雖も而も飽く迄悠々として迫らざる態度天晴君の將來を想はしむるには充分の出來榮であつた

○奈翁崇拜論 山崎 多門君(一)

君も矢張水野君と同様初陣の論壇に立ちて活躍を試みんとせしも遂に場慣れぬ爲惜くも壇上の花荒き彌次風の下に散つたは残念なごとなりき

○淳滯 吉澤 豊一君(一)

登壇一番印度の大佛と彌次の一矢を放たれたはど飽く迄ブラック代表者だ而し最も青年らしき元氣で終始快辯を振はれ流石の野次も鳴りを静めたのは近來になき出來榮だ

○讀書に就て 長谷川 毅君(一)

劈頭一番莊重な口調を以て歐洲戰爭の讀書界に及ぼしたる影響を述べ順次に近來邦國

展策を陳べらる豪傑振つた態度最もよし

○目的 校長 先生

學生たるものは須らく目的を立て、猛進すべしとの一場の訓話を面白く説かれて多大の感銘を與へられたり

閉會の辭 長坂 清介君

妄評を試みしを諸君に御詫する(平田記す)

長野縣蘇門會便り

丙辰の年も旬日ならで暮れなんとする舊臘廿二日の押し追りに縣下二市十六郡の林業技術員會(未設置の郡市は主任書記出席)が縣廳に催されしを機として例により蘇門會を其廿三日の夕市内西洋軒に開く機に應じて會するもの

小林區署側

齋藤 正雄 金井 澄水 關 琴義

關谷 靜夫 丸山嘉一郎 金井 欽

郡役所側

脇田正義(小縣)但馬廣造(諏訪)篠原昇士

(北安曇)中俣伍市(下高井)松澤莊太郎

(上水内)外に岡田恒治、齋藤海藏

縣廳側

高 樋 博 服部啓治郎 伊藤 喜代

の學生界に漲る讀書に對して最も吾人の注意すべき事項を述べられた記者は内容の充實した既に大家の域に入りつゝある君の辯論を聞いて畏服した

○諸葛孔明論 山下不二三君(三)

君の辯論に就ては既に定評のある處だから今更述る必要もないから略す

○自殺 鈴木 繁君(三)

少壯論客の定評ある君の演説が悪かろう筈がない言々金玉の響を發すとすは將に君の如き辯論を云ふならん好漢それ自重せよ

○道徳上の租税 古畑今朝茂君(三)

幾多の戰場を踏んだ君の辯論は精練された會校の花とも謂ひ得べき者だ巧妙なるゼスチニアト朗然たる美聲は將にイロクエントマンの資格を充分に具備している

○坂本龍馬 近森 良材君(二)

生氣煥發南海男兒山林王を以て任する君勇躍して論壇に上れば立ちどころ數千言滿堂の野次鳴りを潜めて肅然たり説く所郷土の花勤王の志士坂本龍馬近頃稀に見るの快辯であつた

○實業家の今昔 吉田 良惠君(一)

處女演説としては成功の方だろう

○人生の目的 木下 武夫君(二)

にして安藤前校長と技術員側に列席せられし七宮校長の出席ありて合計十有八名なり初對面の挨拶やら新郎振りの押揃も一通り済めば聽てナイフホークの音と舌鼓が一シキリ連發されて續いて各所に談論の風發せられんとする氣勢の見わたるよりチャンスを逸せまじと氣を利かした積りに持ち廻した「隨文雅樂多」に健筆を走らせしもの、跡は

僕の主義何ッ糞エイツ糞 但 馬

おいめにき親爺一ツの蘇門會 會

蘇門より流れ出たる嘉野川

今日會ふ事の樂しかるらん 山 仙人

おなト谷間を流れ出で

未廣々とはてもなし 蘇 峽

細君に引きづられ行く千鳥足

有妻の諸兄へ 佐 伊 塔

年の暮不景氣知らずの蘇門會 關

蘇門會今宵短かしの暮 仲 俣

バンザイ 關谷靜夫

坤上唯可頼者真我腕也 大樹小人

大バンザイ 今 井

理窟これそろひも

揃ふた蘇門會 篠 原

校中稀に見る大男登場するや先真面目な態度にて人生の最後の目的は成功に在りと諄々として迫らざる態度は最もよろしされど五六分の元氣を加味せば更らに可なりしならんと思はれた

○偶感 唐澤 繁夫君(三)

聽者をしてきかしむる者は雄辯家なりといつも乍ら君の辯には感服する

○年末 松崎 長三君(三)

演者獨特の快辯を以て歳末に於ける感を披瀝された簡單にして最も徹底した辯であつた

○木曾義仲論 平田久良治君(三)

記者自身を自身で評論する理にもゆかないから止めて唯校友諸君の御批評に任すより致方があるまい

○偶感 奥村安太郎君(一)

彌次の爲に記者は内容を充分に拜聴するを得ざりしは残念なとた從て評論も書けない之は記者として最も御詫する次第である

○人としての忠度卿 今井 徹郎君(二)

君の辯論に就ては定評のある所故に畧す

○國民の元氣は國家の進歩にして學校の進歩は學生の元氣に在り 下平三雄君(二)

堂にたる態度を以て將來に於ける會校の發

未吉君、倉澤建雄君、篠原忠治君、原正造君、川口勇二郎君、神作四郎君、小池一郎君、向井辰雄君、山崎三男君、藤田要吾君、藤卷壽一君、中垣英一君、吉川真夫君、高野金作君、原喜四三君、長谷部久雄君、甲田林君、千村善三君、鹽川金次君、原田洋平君、梅田吉郎君、小崎次郎君、二木季人君、上野道之助君、上野哲君、羽津半兵衛君、柳澤義雄君、原潔君、小松良輔君、荻原惠治君、齋藤正雄君、市川豊二君、今井安男君、佐藤一郎君、柳澤止之進君、今井武雄君、小瀧升太郎君、池田仲治君、池野萬次郎君、中村五郎君、千村吉雄君、田中榮一君、吉澤英雄君、服部啓次郎君、野本與一君、千村萬藏君、原貫一君、水橋要作君、山梨縣蘇峽會、上條嘉一郎君、石曾根四郎君、岡西謙三君、仲田惠令君、但馬廣藏君、樋口颯君、丸山岩吉君、小原靜雄君、伊藤昇次君、小林政基君、永井順君、長谷部真一君、宮崎惠朝太君、篠原忠治君、宮入汎省君、小井哲三君、市岡淳一郎君、樋口徳一君、中畑耕佐君、不免修六君、一之瀬架

知郡山部村東京帝國大學農科大學演習林派出所を勤を命せらる  
 ○新井彌藏君 今回、原と改姓せらる  
 ○古畑秋藏君 今回、帝林管理局甲府出張所を辭し歸郷せられたるが西筑摩郡開田村字西野中澤家の養子とならる、筈なり  
 ○柳澤得衛君 一月廿四日朽木縣廳に赴任せられたり

謹賀新年  
 併而新年勿々賀状を賜はりたる諸兄に對し茲に厚く御禮申上候  
 大正六年一月  
 長野縣立木曾山林學校  
 同 校 友 會

母校並びに校友會宛年狀を賜はりたる各位に對し左に其名を列記し御禮に代へ申候  
 長野縣農會、安藤時雄殿、松田力熊殿、松原大造殿、新家教諭殿、山村次一君、原七郎君、小羽根安治君、細江七兵衛君、福澤定雄君、原恒君、澤柳壽夫君、坂田勘太郎君、森次郎君、吉田精一郎君、黒崎洋治君、岡戸廣次君、小山田喜太郎君、佐々木久一君、森

正次君、松澤敏男君、山下常記君、小林英一郎君、千村彌之助君、小松精内君、柘植五郎君、遠藤宗作君、岡田彌兵衛君、高橋博君、古畑七三君、中島利昌君、杉本實君、吉田佐十郎君、森下義郎君、遠藤治一郎君、加藤正次君、前田正義君、肥後金四郎君、久保田吾良君、矢島駒二君、松本精太君、加藤清一君、木下稗藏君、新田稷君、加藤源一郎君、小藤作四郎君、伊藤喜代君、岩瀬幸吉君、安藤晃君、和田宗吉君、兒野榮君、奥村利一君、種倉隨藏君、樋口智久君、宮城忠藏君、田中吟重君、黒河内祐紀君、鶴岡政義君、市岡新八君、大洞盛一君、高野薰見君、小林秀一君、松澤莊太郎君、温井誠一君、古根是君、坪倉藤三郎君、中田辰雄君、横山治人君、代田文之助君、長谷川義雄君、小池茂樹君、市川潔君、坂本光太郎君、河野長六君、嶋田雄太郎君、松島九平君、市岡正茂君、征矢野餘所夫君、宮澤嘉一君、小池金三郎君、古畑秋藏君、市橋政吉君、蜂須賀宮治郎君、野村光智君、征矢朴郎君、松川久吉君、上田彌太郎君、岡戸郁二君、下條初太郎君、宮森太一郎君、熊谷清逸君、佐藤光造君、關琴義君、渡邊知則君、恩田司馬之介君、柳澤邦信君、南村

古根勳君、近森良材君、原川只一君、池口福雄君、鷹見勳君、佐塚甲子君、米久保春雄君、篠原將英君、青木忠太君、福川正三君、

第十六回運動會費用  
 殘金支出報告  
 一金參拾五圓五拾八錢八厘 殘金  
 內  
 金拾參圓四拾壹錢 マラソン競走入費  
 金九圓參拾錢 提灯及蠟燭代  
 金七圓 松原教師餞別  
 金四圓參拾七錢 優勝旗製作費  
 殘金壹圓五拾錢八厘也

林友代領收報告  
 金貳圓 小池一郎君  
 金壹圓六拾錢 大森久治君

友に大峰(逢ふ身ね)松(待つ)かひ有りてくんで嬉しい今日の酒  
 澄 水  
 發展發展又發展  
 口の人たれ腕の人たれ足の人たれ  
 過去現在未來を通じて  
 蘇門の世界的名聲を博せん事を希望す  
 三代目校長誌す  
 意氣は御嶽氣焔はみ嶽  
 中の木曾川酒として 伊那谷生  
 嬉しさや今宵の集い木曾男 山の人  
 如鯨飲 如馬食 而氣成虹 七宮生  
 斯くて木曾節も二三度ドラ聲に繰り返へさ  
 れ昔ゆかしき語り草や耳の痛き舊惡の暴露  
 や鶴殿君の奇行が哲學的心理學的に論議さ  
 れると思へば中村軍曹の屏越談に華が咲き  
 大抵満足する迄に語り盡されて母校の萬歳  
 を三唱して散會せしは十時過(會員の一人  
 誌す)

會員消息  
 ○加藤正次君 昨年一年志願兵として横須賀重砲兵隊に入營せる全氏は終末試験に及第し昨冬歸郷せられたり  
 ○池田仲治君 昨冬十二月十五日北海道空

母校並びに校友會宛年狀を賜はりたる各位に對し左に其名を列記し御禮に代へ申候  
 長野縣農會、安藤時雄殿、松田力熊殿、松原大造殿、新家教諭殿、山村次一君、原七郎君、小羽根安治君、細江七兵衛君、福澤定雄君、原恒君、澤柳壽夫君、坂田勘太郎君、森次郎君、吉田精一郎君、黒崎洋治君、岡戸廣次君、小山田喜太郎君、佐々木久一君、森

正次君、松澤敏男君、山下常記君、小林英一郎君、千村彌之助君、小松精内君、柘植五郎君、遠藤宗作君、岡田彌兵衛君、高橋博君、古畑七三君、中島利昌君、杉本實君、吉田佐十郎君、森下義郎君、遠藤治一郎君、加藤正次君、前田正義君、肥後金四郎君、久保田吾良君、矢島駒二君、松本精太君、加藤清一君、木下稗藏君、新田稷君、加藤源一郎君、小藤作四郎君、伊藤喜代君、岩瀬幸吉君、安藤晃君、和田宗吉君、兒野榮君、奥村利一君、種倉隨藏君、樋口智久君、宮城忠藏君、田中吟重君、黒河内祐紀君、鶴岡政義君、市岡新八君、大洞盛一君、高野薰見君、小林秀一君、松澤莊太郎君、温井誠一君、古根是君、坪倉藤三郎君、中田辰雄君、横山治人君、代田文之助君、長谷川義雄君、小池茂樹君、市川潔君、坂本光太郎君、河野長六君、嶋田雄太郎君、松島九平君、市岡正茂君、征矢野餘所夫君、宮澤嘉一君、小池金三郎君、古畑秋藏君、市橋政吉君、蜂須賀宮治郎君、野村光智君、征矢朴郎君、松川久吉君、上田彌太郎君、岡戸郁二君、下條初太郎君、宮森太一郎君、熊谷清逸君、佐藤光造君、關琴義君、渡邊知則君、恩田司馬之介君、柳澤邦信君、南村

